十一　家族の愛（太陽系）

　黒点が赤い炎を突き破って吹き出した。

「もう、ここには」

　そして、今度は、その黒点を覆い隠すように赤い炎が大きく渦巻くいた。

「いられないわ」

　太陽の黒点と赤い炎は漆黒の暗闇の中に、自分たちの居場所を見つけるかのように宇宙の彼方を見つめた。

「どうしてなの？パパとママ」

　一番年下の四女の月が尋ねる。

「馬鹿だな。そんなこと聞くなよ。俺たちは、とどまるんじゃなく、流れていくもんだよ」

　下から二番目の五男の水星がしたり顔で、口ずさみながら横を通り過ぎていく。

「どこへ流れるの？」

　月は不安そうに、傍らにいる三男の地球の手を握り締める。

「どこにも流れないよ。心配しなくていいよ。僕たち家族はいつも一緒だよ」

　地球は月の手を強く握り返す。月の今にも消えそうな上弦の明るさが満ちたりた微笑になった。

「ふん。月はいつまでたっても子供なんだから。だから、一人でどこにも行けずに、地球兄ちゃんの周囲から離れられないんだ」

　水星は捨て台詞を残して、どこか彼方へ立ち去った。そう言いながらも、やがては家族の下に戻ってくるのだが。

「原因はブラックホールですね。あいつが日増しに巨大化している姿を目にしています。このままでは、僕たちはあいつに飲み込まれてしまいます」

　長男の木星が大きく立ち上がった。太陽にも負けないぐらいに成長した姿がそこにはあった。

「じゃあ、どこへ行くの。あたし、水があるところがいいわ。お化粧もしないといけないし」

　三女の金星はスマホの画面をカメラの自撮りに切り替えて、画面に向かって眉を上げたり、口を尖らしたり、えくぼを作ったりする。

「どこだっていいじゃないか。誰もお前の顔なんて気にしていないよ」

　次男の土星は、することがないのか、フラフープを腰で回して遊んでいる。

「兄ちゃんはいつだって、頭にわっかを引っかけて、お気楽なんだからいいわね」

　自分の顔を否定されたので、金星がすねたように口を尖らして言い返す。

「なんだと！」

　お気楽の言葉が癪に障ったのか、それが事実だったのか、土星は金星に近づくとスマホを奪い取ろうとする。今にも一触即発の雰囲気。

「兄妹喧嘩はやめろ」

　長男の木星の巨体が二人の間に入る。二人は押し出されて、遠くに離れた。

　双子の姉妹の冥王星と海王星が

「そうよ」

「土星兄ちゃんは女の子のことを知らなすぎるわ」

「デリカシーがないのよ」

「ただ単に、頭が悪いだけなのかしら」

と、妹の金星を援護しながら、かしましいぐらいに土星を非難する。女同士という生き物は、普段は、見栄を張って互いに敵のような振る舞いをするけれど、敵が男だと共同戦線を張り、一致団結して、攻撃を仕掛けてくる。

「ふん。みんなよってたかって俺を責めやがって。ただ単に俺の頭のわっかと腰のフラフープがうらやましいだけだろう」

　多勢に無勢になった土星はふてくされ、家族の輪から離れると、自分だけの世界のフラフープの輪の中に入る。

「あれ、みんなどうしたの？」

　遊びに出掛けていた四男の火星が戻ってきて、家族の奇妙な雰囲気に気づく。

「俺たち家族はここから引っ越しするんだって」

　背中を向けていた土星はフラフープをひたすら回し続けている。

「ええ？引っ越すの？今日まで長い間、ここで暮らしていたのに。友達だっているのに・・・」

「パパとママが決めたことなんだ」

　木星がやさしく火星を諭す。再び、太陽の黒点が湧き上がってくる。

「さあ、出発」

　そして、赤い炎が黒点を覆った。

「するわよ」

　黒点の父と赤い炎の母は意を決したように動き出した。

「待って。お人形さんを持っていかなゃ」

　地球に手を引かれていた月が手を伸ばす。そこには長い間、月に抱かれて白色が黒く薄汚れたうさぎの人形があった。

「しょうがないなあ」

　どこかに行っていたはずの水星が再び戻って来て、置き忘れたうさぎの人形を手に取ると、月に手渡してやる。

「ありがとう。水星お兄ちゃん」

「どういたしまして」の言葉が終わらないうちに、水星はまた異なる軌道に乗って、家族から離れていく。

「さあ、僕たちもパパとママに着いて行くぞ」

　長男の木星の掛け声で、まずは、水星なのだが、どこかに行ってしまったので、続いて、金星、地球、地球に手を引かれた月、土星、木星、冥王星、海王星の順番で、太陽の後をついて行く。

　こうして、太陽家族は新たな安住の地を求めて銀河系を後にした。この家族に付着して、しがみついて生きてきた人類や妖精、ギリス星人、カマキリ星人、人魚、半漁人、シクラメン星人たちも、当然のように行動を共にした。